TBS落語研究会　２０２３年６月２３日（金）（第６６０回）
新・落語掌事典

田中優子

●お足（雛鍔）

この噺には、植木屋の息子が親に「お足をくれ」とせがむ場面がある。お足は穴空き銭を指すことが多かったようだが、後に金銭全体を指す言葉になった。まるで足が生えているかのように、人の間を行ったり来たりすることから使われるようになった。お足は「お銭」と表記されることもあり、接頭語の「お」をつけた女房詞である。強欲な人はいつの時代にも存在するが、江戸時代を成り立たせた政治思想は朱子学である。朱子学は金銭を最優先とはしない。例えば「経済」という言葉は金を稼ぐ意味ではなく、世の中を経営して、万民を救済する意味だ。これは商人が人々を助けることで顧客の信頼を得るための「商人倫理」にも繋がり、商人は利鞘を取りすぎないようにするとともに、橋や河川などの公共物を自ら建造し、あるいは金銭を寄進していた。現代の企業家もそうあって欲しい。

●犬目（犬の目）

この噺とは無関係かもしれないが、犬目は「涙が出ない目」のことで、転じて泣くことを知らない非人情な人を指す。これは眼の病気ではないので、病院へ行っても目薬を指しても治らない。ペットが流行の昨今は「いや、犬も涙を出す」と言う飼い主の意見が出そうだが、それはおそらく何らかの病気が原因で涙腺が活発になるからであろう。確かに切ない声は出すが、涙は流さない。人間が様々な色を識別できるのは、網膜に色を感じる錐状体という細胞があるからだ。犬にはその錐状体がほとんどないことから、色盲であると考えられていた。しかし、最近の研究で色の識別能力には限界があるが、見えていない訳ではないということがわかってきた。犬は人間の言葉を使わないので事実はわからないが、この噺の患者に訊けばおそらく明確な回答が得られるに違いない。

●妓夫太郎（ぎゅうたろう）（五人廻し）

噺に登場する妓夫太郎は遊里で働く男性従業員の総称で、総監督とも言える店番、客引きの立番、勘定の徴収と記帳をする仲働き、寝具の始末をする床番、掃除と飲食物の世話をする追回し、書類をつくる書記等の職種を、複数人で分業していた。この噺のようにマネージャー職である遣手婆の指示の下で「廻し」の駆け引きや客の応対もした。妓夫太郎は「牛」や「牛太郎」とも書く。更に「妓有」とも書き、明治以降に「妓夫」の字が当てられたようだ。職種に応じて給料は定額制や歩合制あるいは祝儀だけと、まちまちだった。所属組合の寄子（よりこ）として所属親方の支配下に置かれ、専門の紹介業者が斡旋した。語源は、江戸時代初期の風呂女が禁止されて吉原に統合された時、風呂の及台という腰掛けを取り入れたことと関係があるようだ。

●夕涼み・納涼（江ノ島の風）

この噺は、上方噺『須磨の浦風』の江戸版であろう。江戸時代の夏は、温暖化や環境問題が逼迫している現代ほどではないにしろ、冷却冷房装置がなかったので暑かったのは確かだ。しかし夕暮れ以降はどうだろう。ヒートアイランドの原因でもある地面を覆い尽くすアスファルトはない。海風や川風を阻む高層ビルもない。温風を出し続けるエアコンの室外機もない。夏を描いた浮世絵が当時を物語っている。夏の到来を告げる季節の物売り（蚊帳売り、簾売り、心太売り、冷水売り、枇杷葉湯売り等）が増え、隅田川の両国橋で花火が打ち上げられる。夕涼み客が川堤や橋を行き交い、隅田川には納涼船が浮かび、茶店や見世物小屋では夜店を出す、という具合に夕暮れ以降は過ごしやすく楽しかった。それにしても、避暑地を丸ごと自分の元に持ってくる発想はメタバースの予見だ。

●お化け（お化け長屋）

お化けを辞書で調べると「ばけもの、妖怪、変化（へんげ）、幽霊、異様なもの、奇怪なもの、人間離れしたさま」とある。色々ごちゃ混ぜになっていて釈然としない。これらに共通しているのは、人間の理解を超えていることであろう。つまり理解をさせないという意図が感じられる。実体がわからないものほど恐怖は強さを増す。逆を言うと理解できると恐怖は薄れるものだ。畏敬の念は必要だと思うが、脅して排除するというのは多様性を無視している。この演目は、上方噺の『借家怪談』や『化物屋敷』を初代桂小南が東京に移したものだと言われている。しかし、滝亭鯉丈の『滑稽和合人』上編上巻に類似場面があることから、元々は東京の落語だと考える者も存在する。上方では長い話に引き伸ばして上下に分け、二人の演者がリレーで行ったという斬新な試みがあったそうだ。

田中優子（法政大学名誉教授、江戸東京研究センター特任教授）
法政大学社会学部教授、学部長、法政大学総長を経て現職。
専門は江戸時代の文学、美術、生活文化、アジア比較文化。
現代社会についての連載エッセイなどもある。
『江戸の想像力』で芸術選奨文部大臣新人賞
『江戸百夢』で芸術選奨文部科学大臣賞、サントリー学芸賞
その他著書多数。2005年紫綬褒章。